

住宅革新群団

日本ホームビルダー協会の足跡

記念誌発刊のごあいさつ

このたび日本ホームビルダー協会と（社）日本ツーバイフォー建築協会の正式合併に際し、10年の輝かしき伝統のある日本ホームビルダー協会の足跡をたたえる記念誌の発刊を企画いたしましたところ、各方面から全面的なご支援、ご協力を賜ることができ、ここに無事上梓することができましたことを衷心よりお礼申し上げます。

できあがりしました記念誌を手にしてみて、私共は改めて日本ホームビルダー協会の足跡の大きさに驚いております。民間の中小ホームビルダーが、理解ある資材メーカー、流通業者の協力を得て、それまでの「野丁場主体の住宅産業論」を「町場主体の住宅産業」に置き換え、消費者の側に立って行政をも動かして参りました。民間のエネルギーがこのような爆発したということは日本の建築史上例をみないところであります。

2×4工法の日本への導入とオープン化。ランドプランニング技術の導入と公庫融資の制度化。スーパーバイザー制度の導入とクルーづくりによる生産性向上運動。さらには商品開発と中小住宅業における営業システムの開発・研修。そのいづれもが町場の工務店が住宅業に脱皮するために不可欠のものであります。近代的なホームビルダー経営の具体的内容そのものであります。そのハードおよびソフト技術の開発と普及を率先して行ない、全国のホームビルダーに武器と勇気を与えつづけてきました。

この記念誌は、そうした武器によって、着実にホームビルダーとしての企業基盤を、それぞれの地場において確実に築きつつある男達の姿をくっきりと描きだしております。それは、私共の想像した以上の力となってきました。大きな山車は、動きだすのが遅い」と

いのがありますが、会員各社のうねりはまさにその大きな山車であるということをお私共に教えてくれています。日本ホームビルダー協会の10年は、全国の畑を耕し、種を蒔き続けた10年でした。その結果として全国各地に優良ホームビルダーの芽が出、双葉が育ってきています。これほど誇らしい事実があるのでしょうか。

本来、日本ホームビルダー協会は、全国のホームビルダーと共にすすく育ってゆくはずでした。独自性と主体性をもった中小ホームビルダーによるイノベーション団体として町場の工務店に光を与え続けてゆくはずでした。しかしまことに不幸なことに、行政の手によって大きな実をつける花を、蕾のうちにもぎとられてしまい、合併という次善の道を選ばざるを得なくなりました。今もって、残念至極なことでございます。

そして、正直なところ私共は、今にして日本ホームビルダー協会の旗を降ろしてしまったことを、深い反省の中で後悔しております。これほどまでに全国各地で仲間が頑張っているという事実をお互い事前に知っていたら、私共は絶対に旗を降ろそうとしなかったはずで、仲間がこれほど育ってきていると知ったら、どのような逆境の中でも頑張り続けたはずで、とはいえ、私共はすべてを失ったものではありません。この記念誌を通じて、私共はさらに新しい武器と勇気を得ました。10年の歴史に裏打ちされたホームビルダーイズムと仲間としての連帯感、記念誌を通じて一段と高まり、新しい時代にふさわしい運動を呼びおこしてゆくものと確信いたしております。

記念誌発刊に寄せられた皆様方のご支援を心から感謝いたしますと共に、この記念誌が第二次ホームビルダー運動の新しいうねりを呼びおこす起爆剤になることを希望いたします。

昭和55年6月吉日

記念誌発刊委員会・委員長 中川 恵 章

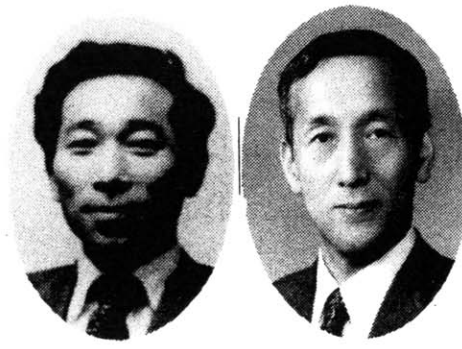
委員 高倉 俊 明

委員 平岡 一 二

委員 杉山 恭 彦

2×4のメツカ・帯広 信頼関係で高シエア

(株)長谷川産業



取締役 所

社長 長谷川

帯広は北海道でも寒さの厳しいところ。冬になると、道央から襟裳岬まで連なる日高山脈を越えて、身も凍るような冷たい風がわがもの顔で荒れ回る。

この地で、ツーバイフォー工法住宅の先駆者となったのが、長谷川産業である。同社の本業は、家具販売業であって、帯広、釧路、北見、紋別、札幌に店を持ち、年商は75億円にも達している。道産

子で「家具の長谷川」を知らぬ者はない。

その家具の長谷川が、帯広を中心とした十勝でツーバイフォー工法を初めて手掛けるキツカケを作ったというのだから、普通の人は信じられなくなる。

同社は、現在代表取締役社長である長谷川晃三氏が昭和28年に設立し、今年で28年目を迎えようとしている。長谷川氏は大正9年生れで、今年60才。温厚実直な紳士である反面、家具販売業の中において理論家としても知られており、日本優良家具販売協同組合の理事などを務めている。

しかし、長谷川氏のこれまでの人生は決して順風満帆だったわけではない。早稲田大学を卒業すると、直ぐに徴兵されて中国大陸に渡り、そこで終戦を迎えている。

その後、シベリアに抑留され、ようやく、昭和22年に帰国したのである。氏はこの辛かった経験を通じて得た自らの人生観を、身近な人に時折話すという。「私の人生は一度大陸で終わっている。一度死んだ人間は何ものも恐れない」とこの人生観こそが、安定した銀行マンという生活を氏から捨てさせ、昭和25年に家具の卸販売個人営業を始めるという行動に駆り立てた。

さて、同社とツーバイフォー工法の関係ということになると、どうしても紹介しなければならぬ男がいる。家具の長谷川にあたって、唯一建材を扱っているハウジング長谷川(建材店)で陣頭指揮してる所貞芳取締役店長がその人。昭和14年生れの今年41才。温厚な印象を与えるが、ツーバイフォー工法には非常な情熱を傾けている一徹者である。

所氏のツーバイフォーとの出会いは、昭和46年に始まるが、それが決定的となったのはその次の年の47年だという。この年の一月に、

氏はアメリカにツーバイフォーを見学に行った。その時ホームビルダー研究所長の鶴野日出男氏、現在協会の事務局長である土谷福三郎氏らと知遇を得て、さらに、株よねくらの高倉俊明氏とずっと同室であったという。これらの人との出会いと本場で目の当りに見たツーバイフォーが、氏に深い印象——ツーバイフォーこそが、十勝の地に最も適した住宅になるに違いない——を与えたのだった。

本場で、いわばツーバイフォーの洗礼を受けた所氏は48年、日本ホームビルダー協会に入会している。この年から、長谷川産業と取引のある大工さんを集めてツーバイフォー勉強会を開催し、49年1月には大工さん27名を含む総勢34名でアメリカ西海岸に視察に行ってきた。この視察には、所氏だけでなく長谷川社長も参加したという。しかも、視察費用は前年の春から月々3万円の積立を参加者がそれぞれに行なったのだった。こうした長谷川の一連の動きが、



省エネ性能で公社団地でも即日完売の2×4

十勝の地にツーバイフォーを芽吹かせ、その施工グループとしての十勝ツーバイフォー協会を誕生させることに繋がっていくのである。

長谷川におけるツーバイフォーを語る時に、所氏の存在とともに忘れてならないのが、十勝ツーバイフォー協会（赤坂芳雄会長）である。

る。

この協会は、いわば大工さんの集まりで、昭和50年以後に組織化され、現在は11の工務店が参加している。こうした大工さんのグループに、技術や資材の面で強力なバックアップをしているのが長谷川産業。そればかりか、大工さんに顧客の紹介をしたり、北海道住宅供給公社の仕事をとってきたりもする。

ここには、住宅資材店と大工さんの見事な連携プレーがある。大工さんの不足している機能を補いながら、長谷川は大工さんと共に繁栄してゆこうとしている。見事な信頼関係とって言いだろう。帯広市の大工さんたちには2×4工法というのは儲かるものらしいぞという口コミが伝達している。十勝ツーバイフォー協会の中心メンバーの3人が多くの受注を抱えていることを見ているからだ。

十勝ツーバイフォー協会会長の赤坂芳雄氏は次のように語っている。

「長谷川産業、強いて言えば所さんの存在がなければ十勝のツーバイフォーはなかった。所さんはかなり強引な面もあり、我々は反発しながら付いてきた。結局は、説得されたんですね、いつも」。

所氏はこれまでを振り返って、「十勝では、ツーバイフォーが地域にしっかりと定着する土壌が出来つつあります。今後も大工さん達と協力して、十勝をツーバイフォーのメッカに行きたい。そのためには、私共のところは単なる建材店であっては絶対にいけないと思っています」と柔和な顔をひきしめる。帯広で3%のシェアをとった2×4住宅は、やがて5%から2桁台へと進んでゆこう。大手企業の手によってではなく、町場のグループの手によってそれが達成されようとしているところに、何ともいえない大きな意義がある。

本部 帯広市東二条南六丁目二十
建材店 帯広市東五条南三丁目12

〇一五五(24)七二二一(代)

ワインよりも名物に!?

頑張る三人の先駆者

十勝2×4協会



赤坂会長

田川副会長

久保副会長

帯広を中心した十勝の地で、人々の情熱と努力により予想以上の大きな実をつけはじめているツーバイフォー住宅。

十勝で初めてツーバイフォー住宅が誕生したのは、昭和51年春の

ことだという。建坪が十勝では小規模の部類に入る23坪、平家建てであった。これを手掛けたのが、現十勝ツーバイフォー協会長の職にある赤坂芳雄氏（赤坂建設代表）だった。赤坂氏は当時を振り返って、「今から思えば、ツーバイフォー工法をよく知りもしないで建てたという印象です。非常に簡単に建てるのが出来たので、これはいけると思いました」と語る。しかし、この時の印象こそが、氏らを「ツーバイフォー気狂い」へと駆りたてることになった。

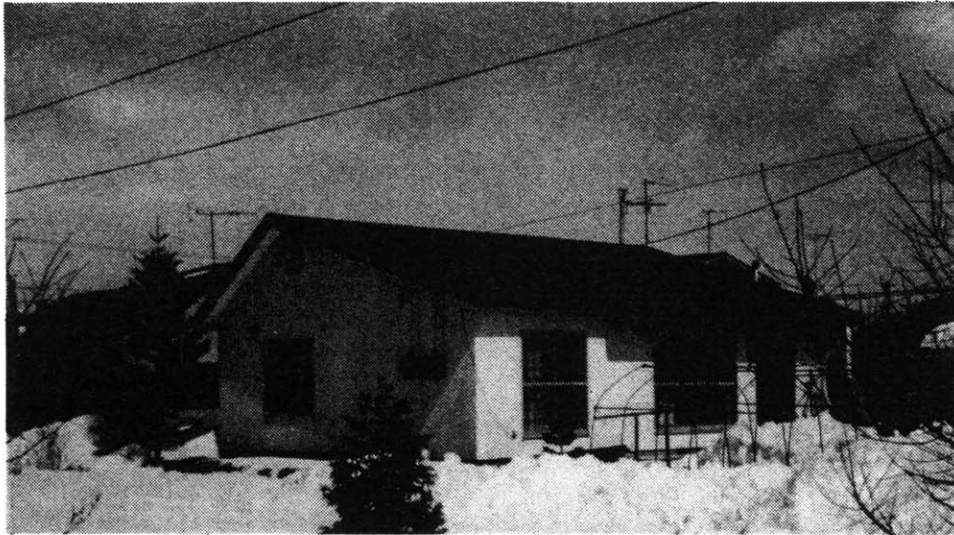
協会は今現在、会員11社で、すべて地場の工務店からなっているが、賛助会員として長谷川産業建材店が唯一例外として工務店以外から参加している。ほとんどの工務店が、ツーバイフォーの施工面からいえば一クラス程度しか持っていない小規模な大工さん達である。ところが、この大工さん達が何と昨年一年間で約70棟のツーバイフォー住宅を建てているのである。北海道の中心地札幌で、昨年40棟程度であったことを考えると、これは大変なことなのである。全国で最もツーバイフォーのシェアの高い地域かもしれない。

協会の歩みは、長谷川産業抜きには考えられない。長谷川が主催したアメリカ視察や研修会などを通じて、協会の中核となる人達が育ってきたのである。この協会には、「3人のサムライ」がいる。会長の赤坂芳雄、副会長の田川泰信（田川建設代表）、久保誠（久保工務店代表）の3名である。赤坂氏は十勝ワインで名高い池田町で三代続いた大工さんである。氏が手掛けた十勝で最初のツーバイフォー住宅が完成した時には、NHK帯広放送局、新聞社が取材に訪ずれたのを初めとして、役所の建築関係者、税務署まで見学にきたという。

赤坂氏のツーバイフォーに対する傾倒ぶりは、まさに「ツーバイフォー気狂い」といえる。それが始まったのは、50年アメリカ視察から帰った後で、氏はその堅牢性、耐久性、寒地への適性を見るにつけ、「これからはツーバイフォーを俺の仕事としよう」と思ったという。

氏は自ら建てた家を非常に大事にする。これと共に住む人との交流をも忘れない。「これからは、アフターサービスが大事な仕事です。その年建てた家はもちろん、何年も前に建てた家や改築だけやった家まで毎年12月末をアフター期間として、一軒一軒回り、悪いところは直します。もう始めて10年になります。」更に、毎年正月3日には、今まで家を建てた人すべてを自宅に招き、お得意先きとのコミュニケーションを図っているのである。まさに、地場の工務店としての在り方を示しているといえよう。

最近、赤坂氏が取り組んでいる



最初の2×4住宅(上)と半地下室のある住宅(下)

ものに、半地下室がある。これは昭和53年にカナダへ視察に行き、ブリテッシュ・コロンビア州の住宅が例外なく基礎部分全部を地下室に利用しているのを見たのが

キッカケだそうだ。帯広では、冬の凍結深度が120センチにも達することがあるため、基礎部分もその深さまで掘り下げなければならなく、それならいっそのこと「半地

下室」としてみてもいいのじゃないか、という考えを持ったという。それを、昨年までに既に実行している。池田町と帯広市の両方で、どこまでも先駆者。自ら穴掘りを

やっつてである。

赤坂建設の陳容は氏と常用5人、それに経理を担当する奥さんの7名だが、今後技術者を養成して年間20棟をこなすようにしたいというのが抱負である。

田川泰信氏。この人はたいへん口下手であり、この地方でも有名な「職人気質」を持った人である。その昔気質の氏がどうして外国で生まれた工法を採用することになったのか。それは、やはり良い住宅を作るに適した工法であると、氏が考えたからにはかならない。

氏の大工としての腕を知って今でも在来工法の注文が多いというが、出来るだけツーバイフォーにしないさい、と若干どもる口調で説得するという。そして、現在ツーバイフォーと在来を半々つっ手掛けているということである。

氏を語る時に忘れてはならないエピソードがある。それは建築業者としては「あるまじき」もので、施工期間が定まらない、というものだ。施工中でも、納得がゆかな



斬新なデザインの2×4住宅

くになると、そこで工事を止めてしま
 まうのだそうだ。氏は語る「建て
 てから文句言われるより、建てて
 いる時に文句を言われた方がいい

にきまっている」
 久保誠氏。まだ若い。それだけ
 に帯広地区のビルダーの中でも、
 最も多くツーバイフォー住宅をこ

なしている。実質半年間程度しか
 仕事のできないこの地区の事情を
 考えると、年間12棟という数字は
 限界に近いものである。今年も
 また昨年以上やることになるだろ
 う、と氏は胸を張る。また、こう
 も語っている「ツーバイフォー工
 法をやって、初めて家を作る技術
 というものが判ったような気がし
 ている。技術には万全を尽すため、
 結露のトラブルなどを起したことは
 一度もない。」

赤坂氏41才、田川氏45才、久保
 氏32才、3氏ともこれからだ。同
 組合の他のメンバーもこの3氏の
 情熱と実行に引きずられた形で、
 今後ツーバイフォーに本格的に取
 り組もうとしている。

赤坂、久保の両氏は「我々十勝
 ツーバイフォー協会のメンバーは
 経営者で、かつスーパーバイザー
 であり、更にはフレーマーでもあ
 るんです。建売業者や大手の住宅
 メーカーとは根本的に違うんです
 よ。」と口を揃える。また、今後
 については「先ず良い住宅をたく

さん建てるのが一番だが、帯広
 に我々の納得のいくモデルハウス
 を設置したいと思っています。他
 はともかく、十勝では絶対にツー
 バイフォーを伸ばしてみせます」
 と語る。十勝名物として、芳醇な
 ワインがあるが、いづれかの日に
 「ツーバイフォー」の方が全国的
 に有名になるかもしれない。

【構成員】

- 赤坂建設 中川郡池田町旭町
- 田川建設 帯広市大正基線百
- 久保工務店 帯広市西四条南三十
三丁目十七
- 河村建設 帯広市西十二条北四
- 志賀建設 帯広市東十二条南四
- 辻建設工業所 帯広市大正町本町東
一条一丁目二
- 千葉工務店 帯広市西十四条南十
六丁目
- 岡本建設 中川郡幕別町緑町
- 笹原工業 上川郡新得町西一条
南二丁目十九
- 千葉組 河東郡鹿追町仲町四
- 武田建設 中川郡池田町字高島